

＜ 今日の説教のポイント 創世記 38章1～30節 ＞

こんな話がなぜここに？ 考え出せば尽きぬ面白さ満載の章！

①この章は何なのか？ 読んでひっかかる2つの問題。

この章を読んでまず思うのは、「なぜユダの話がここに出て来るのか。ヨセフと関係ないのに」ということです。もう一つは、「こんな道徳的にどうかと思う話が聖書に載っているなんて」ということです。しかし、だからこそ、この章で聖書が問題にしていることは何なのかをしっかりと考えなければなりません。

②イエス・キリストに至る系図では、ヨセフでなくユダが重要！

創世記は、その主人公がアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてヨセフと続く物語です。しかし、ダビデ王に続く神の選びの民イスラエルの系図では、ヤコブからヨセフではなくユダへ、そしてユダとタマルの子ペレツに続き、ダビデ王に至るのです（民数記26:21、ルツ記4:18以下）。それは当然、イエス・キリストに至る系図でも同じなのです（そこにタマルも出て来る！ マタイ1:3）。

③神の前での自分の罪に気づかされた時に、人は変わる！

それでもなお、タマルのした行為に抵抗を覚える人がいるかもしれません。しかし、ユダは事の次第を知ったとき、「私よりも彼女の方が正しい。私が彼女を息子シェラに与えなかったからだ」（26）と語りました。彼は、これは自分の罪を考えるように神様から示されたのだと気づいたのです。その時、もはやタマルのいかなる罪も、「自分にはそれを問う資格はない」、と思ったことでしょう。彼はタマルを受け入れ、その末にダビデ王、そしてイエス・キリストが与えられたのです！ ユダもタマルも神様に赦されたのです！

聖書の神様は私たちの色んな罪を問われます。しかし同時に、その時置かれた私たちの状況が無視して事の是非を問われるお方ではありません。この時のタマルの行動について、ある旧約学者が説明している言葉を紹介しておきます。「彼女が用いた疑問の余地ある手段は、権利を回復するということで正当化されている。これによってタマルは、既存の習慣が不正なものとなった場合、これに反抗する族長物語の一連の女たちの一人となったのである」。